

〔書評〕

青木侘子著

## 『現代語助詞「は」の構文論的研究』

尾 上 圭 介

## 一

本書は、一九五〇年代以来助詞「は」と格助詞について思索を重ねてきた著者（青木氏）が、その総決算として、「は」に関して考えられる限りのすべての現象について統一的に説明を与えようとした、きわめて意欲的な書物である。

一九九二年に書き下ろされた本書は、著者の思索の歴史を反映して、次のような構成になっている。すなわち、まず時枝文法の延長線上にあると言ってよい陳述論的な文法論の学史（一九七〇年代前半までの『国語学』の文法論の主流はこれであった）の上<sup>1</sup>に立つて著者自身の文構造観、特に題目―解説構造（題述構造）とは何か、それは広義陳述論的に言えばどのような位置に立つものか、題述構造と格述構造とはどういう関係にあるのかなどについての見解を示し（第一章）、その上で「は」の意味のないし表現的な働きについて、その出現位置やどういう成分に下接する場合かという観点から整理して説明を与え（第二章―第五章）、その後で

特に取り出して説明を与えておくべき二つの問題、「は」と連体修飾との関わり（第六章）、「は」と否定表現との関わり（第七章）に触れ、最後に「は」の係助詞としての特質は何かという観点から本書全体の主張がまとめ直されている（第八章）。

時枝式入子型構造図に係り結びや題目―解説構造がうまく乗らないということに象徴的に表れるとおり、いかに精密化された論であっても陳述論的な文法論では「は」の性質が十分に描かれることはなかつた<sup>注1</sup>。この種の文法論の観点に関心を持つ限り、陳述論的な文構造説明の中に「は」の問題を正當に位置づけたいという欲求のないし使命感は当然のことであり、同じ問題関心、動機をもつて文法の勉強を始めた私にとつて、本書の議論を追って読み進めることはあたかも故郷へ帰って自分の初心を確認するような経験であった。と同時にまた、「陳述とは何か」を独立に問い、その上で「は」と呼応するのはいかなる陳述であるかを問うという問題の立て方はこの助詞の検討のためには全く不毛で、結局「は」の係助詞としての特性は陳述の問題から離れた観点によって解明